

いさをある人ををしへの親にしておほしたてなむ やまとなでしこ

— 明治天皇御製 明治40年1月

日露戦争時、明治天皇は「西方の海みなはらからと思ふ世に など波風のたちさわぐらむ」の御製(天皇の歌)を詠んでいる。

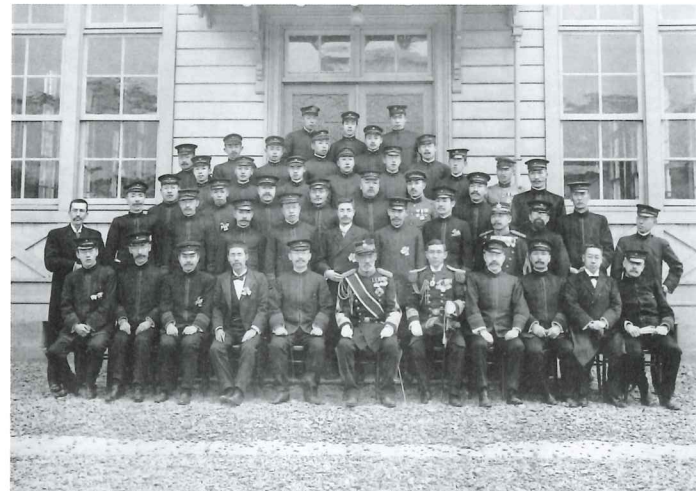
明治38年(1905)1月1日、乃木希典が指揮する第三軍が、日露戦争の最激戦地となった旅順を攻略した。その報せを受けた明治天皇は、敵将ステッセルが祖国へ尽くした苦節を讃え、武士の名誉を保たせよとの命を下したという。乃木はこれに応えるべく「水師營の会見」において、報道撮影を控えさせ、さらにロシア軍将校らに帯刀を許した。会見では互いの勇戦が賞され、この時ステッセルは自身の駿馬・壽号を乃木に贈っている。

敗戦の将に対するこの異例の措置は、国内外の人々を驚かせた。乃木には各国から勲章授与の希望が寄せられ、この水師營の会見の様子は、その後唱歌として歌われ、教科書にも掲載されるようになった。

日露戦争後の明治39年8月、乃木は宮内省御用掛に任命された。その際の天皇の御沙汰には、学習院学生の教育は大変気にかかることとあり、特に乃木に命じて学習院の教育に参与させるとある。これに対し、乃木は就任後さっそく学習院の教育方針について意見書を出し、一度は廃止が決まっていた高等学科を存続へと導き、高等教育の充実を計った。

明治40年1月、乃木は学習院長に任命された。天皇は乃木に学習院の校風刷新を託し、現役軍人のまま院長を兼務させた。この際、乃木に下賜された御製「いさをある人ををしへの親にして おほしたてなむ やまとなでしこ」には、乃木を教育者として日本の未来を担う子供たちを育てたいという天皇の願いが込められている。

この頃は折しも<sup>とうきゆう</sup>迪宮裕仁親王の学習院入学を控えた時期であった。入学にあたっては乃木と東宮職との間で検討がなされ、初等学科6年間の修学が決定し、その教育方針について覚書が交わされた。



「学習院高等学科卒業記念写真」 明治45年撮影  
 (「乃木院長記念写真帖」(以下、「写真帖」)より)



乃木希典所用眼鏡  
 【学習院アーカイブズ蔵】



乃木希典所用インク壺  
 【学習院アーカイブズ蔵】

## コラム

### 御神壇



大正2年当時の御神壇  
 (「乃木院長記念写真帖」より)

御神壇は、明治43年(1910)に乃木が自ら設計し自費を投じて築いた「神域」である。目白の地に学習院が移転するにあたり、構内に神社を建て、崇敬の対象とすることを考えていた乃木が、国学者であり学習院の教授であった井上頼園(1839~1914)の進言により、『日本書紀』の「神籬磐境」に見立てて作り上げた。「神籬」とは、古代、神霊が宿っていると考えられた山や森、老木などの周囲に常磐木を植え、それらを玉垣で囲んで神座とした場所のこと、「磐境」とは、神を祀るために石を囲って設けられた神域のことである。

この「磐境」として作られた前方後円型の基壇は147個の石で構成されている。その内の80個は、乃木が当時の日本の国境から取り寄せたもので、樺太や千島、小笠原諸島の他、旅順や台湾、朝鮮半島などの石もある。現在も青々とそびえたつ神の木は、明治42年落成の新校舎に行幸した明治天皇が天覧した2本の神の内の1本である。乃木が最初に植えた1本は、明治天皇御不例(病)の頃に枯れ果てたため、後に残りの1本を植え替えた。これが今日の神であることとされている。

御神壇は、神祇を尊ぶ乃木の祈りが強く込められた場所であり、学生たちにとっては、襟を正して拝礼する学習院の聖域であった。現在も乃木の高風を追慕することの出来る場として、大切に守られている。昭和30年(1955)、東京都指定文化財。

(助教・柳澤恵理子)



寄宿舎で楽しむことをかぞふれば 撃剣音読朝めしの味

— 乃木希典詠 明治45年1月

明治41年(1908)、中等学科以上の学習院校地が北豊島郡高田村に移転し、9月に全寮制の寄宿舎が開寮すると、乃木は総寮部の会議室・寮長室をそれぞれ居室・寝室とし、学生との寄宿生活を開始した。翌年には院長官舎が完成するが、乃木は総寮部での生活を続けたため、この建物は<sup>大正2年</sup>大正2年(1913)に正式な皇族寮(現在の東別館)が完成するまでその代わりとして使用された。

当時の学生や教職員の談話からは、乃木が日々学生との時間を大切にしていた様子がうかがえる。朝は掃除や食事を共にし、日中は授業の視察、夜の自習時には訓話や音読をし、剣道(撃剣)の稽古に付き合う。院長としての乃木の生活は大変忙しく、目白の学習院本院、四谷の初等学科、永田町の女学部に加え、宮中や陸軍(スチーシオン)を行き来する毎日であったという。移動の際は愛馬に乗るほか、目白停車場から鉄道を利用することもあった。乃木が馬を愛したことは有名だが、ステッセルから贈られた壽号の仔のうち一頭は「乃木号」と名付けられて明治45年から学習院で飼育され、昭和12年(1937)まで学生の馬術教育に貢献した。

学習院には当時、院長服や教官服という教員用の制服があったが、現役の陸軍大将であった乃木は、学習院で過ごす際に常に軍服を着用し、寝るときもその上衣を脱いでシャツのまま横になっていたという。毎日、薬缶一杯の水で一日の洗面から手洗いまでを済ませ、学生もこうした乃木の行いを手本とした。

迪宮裕仁親王が初等学科に入学する前年、学習院長として拝謁した乃木が「今日の様に寒い時や雪などが降って手のこごえる時などでも、運動をすればあたたかくなりますが、殿下はいかがでございますか」と尋ねたところ、「ええ運動します」と答えられたという話もある。

生活を共にして自ら手本を示し、また学生たちの自主性を促し、彼らから「親父」と慕われた乃木の姿は、まさに明治天皇が御製に詠んだ「教えの親」であったといえるだろう。乃木が院長在任中に学生に与えた訓示の一部は、初等学科生向けの「乃木院長訓示要項」や「科訓」として、以後長く学習院の教育指針とされた。

(学芸員・吉廣さやか)



「総寮部に於ける院長使用の諸器物」  
 大正2年撮影 (「写真帖」より)



「乃木号の手綱を手にせる院長」  
 明治45年撮影 (「写真帖」より)

## コラム

### 院長閣下のいちにち

学習院の朝4時半。総寮部の一室に起床した乃木院長は寝具を整え、塩で歯を磨き、冷水で顔を洗う。空の明らむまで読書をする、ゴムの長靴を履いて院内の散歩へ出る。携えるのは長柄の鎌。ここ高田村新校舎の敷地には森に池あり、草原も谷も竹林もある。院長は草を刈って枝を払い、学生たちの暮らす環境を安全に整える。栗の実を拾っているのは、小使へやるのである。朝食は7時。医務室を訪い、療養中の学生を見舞うと食堂へ入る。本日の食卓を朝夕共にするのは中等学科低学年寮の学生たちだ。好き嫌いや不作法には厳しくお小言である。味噌汁は今日も旨かった。

校舎の喫煙室で新聞を読みつつ教職員と歓談し、8時に授業が始まると院長室ならぬ主事室に入る。執務を終えると教場の参観に四谷の初等学科へ向かう。昨日は永田町の女学部へ赴いた。昼食の時間には目白へ戻って教員と昼食をとり、居間で書見。そして13時50分を前に、院長は軍服の上衣を脱いで白の防具に竹の胴を着ける。今日は中等学科1年の剣道の授業のある日だ。学生個々の気質を直接に知り指導ができるこの時間を、院長はこのほか大事にしている。元気よく竹刀をふるうよう叱咤激励し、気合が充実した一本には「参った!」と大声に叫ぶのであった。

15時の間食を学生たちと共にとると御用で外出し、17時の夕食前には帰院。食卓を見廻ると主菜が小ぶりの皿があったので自分の皿と取り換える。18時の自習喇叭が鳴り響くと、総寮部に戻って読書。読書はもっぱら音読で、外にも聞こえるほどの大音量である。自習室から学生が帰寮する時間には灯りを外に出しておく。22時の消灯前には各寮の周囲を巡回。寝台に横たわるやいなや院長は雷鳴のごとき鼾を響かせるのであった。

(EF共同研究員・戸矢浩子)